



四旬節第 1 主日 (マルコ 1:12-15)

悔い改めて福音を信じる生き方に舵を切る

四旬節の主日に入りました。イエスは荒れ野でサタンの誘惑を受けます。同時に天使がイエスに仕える中で、イエスは荒れ野での誘惑を退け、ガリラヤに行って神の福音を宣べ伝えました。どのような誘惑を受けても最後は福音を宣べ伝えるイエスの姿に、四旬節を過ごす心構えを学びとりましょう。

地域の皆さんは福見修道院のシスター岩谷チヅ子さんをよくご存知でしょう。木曜日、脳梗塞の症状が出て朝 4 時半に上五島病院に救急搬送されました。わたしにも連絡が入ったので、朝ミサの時間を気にしながら上五島病院に駆けつけ、病者の塗油を授けました。

ただ、脳内には多量の出血があったようで、処置を受けたものの土曜日朝お亡くなりになりました。日曜夜 6 時から修道院で通夜、翌月曜日 11 時から福見教会で葬儀ミサです。お祈りください。わたしも何かを話さなければなりませんので、これから考えてみたいと思います。

福音はとても短い語りの中で、イエスが受けた誘惑とガリラヤでの伝道の様子を伝えます。同じ出来事を伝えるマタイやルカは、誘惑の具体的な内容や、どのようにサタンに立ち向かったかを述べていますが、マルコは具体的な内容には触れません。この世にあってはイエスさえも誘惑にさらされる。そのことは折り込み済みなので、もっとその先、誘惑を乗り越えたイエスに注目させようとしているのだと思います。

では誘惑を退けたイエスの次の行動とは何でしょうか。それは、神の福音を宣べ伝えたということです。こうしてイエスはわたしたちに、誘惑にさらされることはこの世では避けられないが、その先の神の福音を宣べ伝えることに、いつも心を向けて生活を整えなさいと呼びかけているのです。

それでも、ある疑問が残るでしょう。「誘惑を乗り越えた先の宣教は理解できるが、誘惑をそう簡単に乗り越えられるだろうか。」サタンと呼ばれる悪霊は、人間よりも知恵と力に勝る霊です。誘惑をそんなにたやすく乗り越えられるものでしょうか。

この疑問には次のように答えたいと思います。イエスは 40 日間、荒れ野で誘惑を受けました。このイエスの 40 日間は、40 年の荒れ野でのイスラエルの民の試練を暗示していると思います。また、当時は 40 年という期間はほぼ人間の一生をも表すほど長い期間だったでしょう。

ですから、イエスが 40 日間荒れ野で誘惑を受けていたあいだ天使がそばで仕えていたように、わたしたちが誘惑を受けるとき、イエスがそばにいて誘惑を乗り越えさせてくれるはずで、それは短期間ではなく、人間の一生に渡ってイエスは誘惑に立ち向かうわたしたちを守ってくださるといえることです。

わたしたちのちっぽけな力では、強大な悪の誘惑に打ち勝つことは不可能でしょう。しかし、イエスが常にそばにいて守ってくれます。そ

して誘惑を乗り越えて、神の福音を宣べ伝える者としてくださるのです。

では、何を宣べ伝えればよいのでしょうか。宣教は、何かを伝えるということの前に、生き方そのものだとわたしは思っています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1・15) このイエスの宣教の第一声に従い、わたしたちが悔い改めること、福音を信じた生き方に留まることがわたしたちにできる宣教ではないのでしょうか。

たとえば、徴税人のマタイはイエスの声に従い、弟子となりました。ユダヤを支配するローマ帝国への税金として徴収したお金を数える生き方から、イエスに聞き従うことを中心に据える生き方に切り替わったのです。わたしたちも大なり小なり、お金を数えて生きる生き方をしていきます。わたしたちが大胆に、イエスに聞き従うことを中心に据えて生きる人になれば、それは社会に対して大きな宣教になるわけです。

ナタナエルという人は、フィリポにイエスを紹介されて「ナザレから何か良いものが出るだろうか」(ヨハネ 1・46) と言いました。ナタナエルはイエスに出会い、すっかり変わりました。出身地や、性別や、人種や身分の違いに左右されず、イエスをすべて信じ、受け入れる人になったのです。

イエスを証しするのに十字架上の死はわたしたちにとって抵抗があるかもしれませんが。しかし人間的な思いを捨てて、大胆にイエスのありのままを語る人になれば、大きな宣教ができるのです。

長い人生のさまざまな場面で、わたしたちは神に敵対する勢力の誘惑にさらされています。イエスが共にいて、誘惑に打ち勝つことができるように守ってくださると信じて、目の前の誘惑に振り回されず、むしろ大胆に自分の生き方を証しに変えましょう。

「わたしは、イエスを中心に据えて生きています。」この証しがあれば、難しい言葉がなくても誰もがイエスの弟子、宣教の担い手となれるのです。